

第十四章 ウイルス族

中華明国内には自治領と称する地域が数カ所ある。その中に新型コロナウイルスが発生した地域ではと疑われた自治領がある。新疆ウイルス自治領だ。後ほど説明する。

中国大陸を有史以来漢民族が支配続けて来たことはない。辺境の少数民族に支配されては漢民族が取り返したり、ほかの民族が横取りしたりして絶えず支配民族が入れ替わるという歴史を持つ。マンモスといえども体力が落ちれば数頭のオオカミに屈するように簡単に少数民族に支配される。しかし、少数民族は元々体力がないから、時が流れると崩壊して辺境の地に追いやられる。そのような国々のいくつかが今は中華明国の自治領として細々と生きながらえている。

イリ族は女王イリのもと弟と誤解されたノロに助けられて中華明国からイリ王国として独立した。

何千年もの間、多彩な民族が入り乱れ権力闘争をした結果、もはや純粋な民族というのはいない。人類は混血を繰り返して多様化してきたにも関わらず一部の民族の首長や純血主義を信奉する人々はこの歴史的事実に目を背ける。

ところでこのウイルス族。この奇妙な名前のウイルス族の祖先は「ウクベスタン族」と「イ

リ族」の混血であることに異論がない。それぞれの頭文字を「ウ」と「イ」、そして民族的に近い「ルールマニア族」の「ル」と「スウーデン族」の「ス」をとって民族名が「ウイルス」となったと言われている。

他方ウイルス族と呼ばず「ウイスキー族」と呼ぶ国がある。それはロシアで、「ウ」と「イ」については先ほどの説と同じだが、ロシア国民がスキーを好むという理由ではなくロシア語のネーミングでよく使われる「スキー」を付け足したと言われている。

*

しばらく前に世界征服を狙ったクレードドという組織があつたがノロによつて解体された。そして近年再編されたグレーデッドの大総統にイリガ、閣將軍にノロが就任した。科学力が高いグレーデッドの構成員はノロのアイディアを具体化していく。たとえば宇宙戦艦や時空間移動装置など製造した。いくらノロが天才だと言つても一人では何もできない。しかし、グレーデッドという組織にとつてたやすいことだつた。

ノロが宇宙に飛び出して新たな地球を発見できたのもグレーデッドの構成員の献身的な協力があつたからだつたが、すべての構成員がノロと行動を共にしたわけではなかつた。地球に残つた構成員はちりぢりになつたようだが、どうやら新型コロナウイルス感染拡大で脚光を浴びることになつた新疆ウイルス自治領ではないかという噂が流れた。中華明国内にあり一昔前までロシアの影響力を受けたという地域だがその実態はよく分からない。

トンネル効果で特にウクライナー国内の鉄道をシールド化したのはこの新疆ウイルス自治領にいるかも知れないグレーデッドの流れをくむ科学者ではとイリや加藤や榊もこの自治領を注目した。

*

特急イリ・ライナーはその新疆ウイルス自治領手前の山岳地帯で人民拘束軍の戦車隊によって強制的に停車させられる。

「各国から『国際特急』という承認を受けているのに中華民国の走行許可証がないと新疆ウイルス自治領に行けないなんて」

イリが怒りながら外を見る。戦車がずらりと並んでいる。もちろん砲身はすべてイリ・ライナーに向けられている。

「ここでもトンネル効果があるのかしら」

榊が苦笑いする。

「試しに砲撃してもらいましょうか」

すぐさま加藤がいさめる。

「悪い冗談はよせ」

しかし、イリは榊の意見を受け入れる。

「長老！ 出発進行するように運転手に伝えなさい！」

長老が驚いてイリの腕をとる。

「ここは自重を」

しかし、イリの声が届いたのかイリ・ライナーが動き出す。高速列車なので窓を開けることはできないから外の音は聞こえないはずなのに奇妙な音が聞こえてくる。

「シュー、ドッド、シュツシユ、ポー、ポッポー」

長老が別の意味で驚く。

「まさか。これは……」

「何をブツブツ言ってるの！ 説明しなさい」

「蒸気機関車の音です」

「ピー、ピー」

「汽笛です」

イリにとつてはじめて聞く音だった。哀愁に満ちた力強い心に響く音だ。音だけではない。なんとも言えない煙の匂いもする。状況を察した加藤が想像を言葉にする。

「蒸気機関車だ。イリ・ライナーを牽引しているのかも」

急速に加速するイリ・ライナーに慌てたのか砲撃が始まる。

「やられる！」

若干の振動はあるもののイリ・ライナーはびくともしない。イリたちには見えないが十両編

成のイリ・ライナーは真つ黒な煙を煙突から吐き出す蒸気機関車に引つ張られて山岳地帯に入る。急勾配をもとめせず蒸気機関車は新疆ウイルス自治領の首都ワクチンに向かって速度を上げると悪路や斜面に強いはずの戦車がついていけなくなる。

「この鉄路もシールドされている」

加藤がほつとすると榊が頷く。

「それより蒸気機関車だ。すごい馬力だ」

急勾配を上っているせいか列車は後方に傾斜しているせいか長老が見上げながら忠告する。

「問題はこれからじゃ。あくまでも新疆ウイルス自治領は中華民国の領土じゃ」

「戦車で阻止しようとするなんてウイルス族は中華民国にとって脅威なのかも」

「しかも誰かが蒸気機関車で助けてくれている。と言うことは新疆ウイルス自治領にグレーデッドの構成員が存在していることを意味するのか」

かなり極端な想像力が飛び交う。

*

新型コロナウイルスはこの新疆ウイルス自治領から世界に広がったと中華民国以外の国々が思っていた。当の中華民国は他国から持ち込まれたと反論していたが、名前が名前だけに誰も信用しなかった。

一方、有力なワクチンを開発したのは自治領の首都ワクチンにある大学だった。それほどの

科学力を有するウイルス族はあなどれないが血気盛んと言うよりは温厚だった。だから簡単に中華民国に取り込まれてしまった、あるいはその逆かもしれないが、いずれにしてもイリはあえて特急イリ・ライナーを中華民国へ向かわせたのだ。

「イリ様の意図分かりましたぞ」

イリが苦笑する。長老が深く頭を下げる。そのときイリ・ライナーが停車する。ワクチン駅に到着した。真つ先にイリがホームに降りる。前方には真つ黒な蒸気機関車が白い水蒸気を吐いている。エネルギーに満ちあふれた勇姿にイリは感動する。あらためてイリ・ライナーに視線を移す。

「わああ！ ボコボコ」

シールドされていたが至近距離の砲撃にイリ・ライナーはかなりのダメージを受けていた。窓ガラスが割れていないのが不思議なくらいだった。ホームには人影はなく蒸気機関車のテンダー音を除いて静まりかえっていた。やがて数人のウイルス人が白い箱をイリ・ライナーに積み込む姿に気付く。白く見えたのは箱から白煙が下方に流れていたからだ。ドライアイスで箱が低温に保たれていることを示している。

後ろから不意に声をかけられる。粗末なウイルス族特有の民族衣装を着た女性がいた。

「女王イリ様」

恭しく礼をすると静かに語る。

「あれは新型コロナウイルス対応のワクチンです。ウクライナ共和国ではワクチンが不足していると聞いています。わずかですが届けていただければと」

女性の携帯電話が鳴る。一言二言応答するとイリを急かす。

「中華明国人民拘束軍がこちらに向かっています。すぐ出発してください」

イリは頷きながらも質問を連発する。

「あなたはグレーデッドの方ですか？ お名前は？ それに……」

しかし、女性は遮って続ける。

「あの蒸気機関車を反対側の先頭に移動させるだけの時間がありません。さあ、急いで！」

イリはこの女性の迫力に押されて特急イリ・ライナーに戻る。

*

イリ・ライナーは新疆ウイルス自治領からイリ王国に向かう。下りだからと言うことではない。下り坂に任せて走行すると加速して脱線してしまう。ブレーキをかけ続けると摩擦熱でブレーキが壊れてしまう。大車輪を使って速度を制御する蒸気機関車の助けが必要になる。イリ・ライナーの最後尾に逆向きに連結されたまま蒸気機関車はブレーキの役目を務める。

往路と比べて復路のシールドは強力で人民拘束軍から様々な攻撃を受けるが問題なかった。

しかもボコボコだったイリ・ライナーは製造直後の新品のように修復されていた。しかし、車内のイリたちが気付くことはなかった。

「あの女性、大丈夫かしら。それに私たち何のために新疆ウイルス自治領に行ったのかしら」

「自治領の状況を調べに行ったが、結局ワクチンのお土産を貰いに行ったという感じかな」
榊の発言に加藤が頷くが長老が深刻な表情をする。

「人民拘束軍の拷問は過酷じゃ。無事でいればいいが」

イリの表情が曇る。改めて新疆ウイルス自治領といいウクライナー共和国といい、大国のエゴでボコボコにされていることに怒りが沸騰する。

「核兵器を復活させてウクライナーを脅迫する。もう我慢できないわ。本当に持っているかどうか確かめる。もしそうならプレンコンを人民拘束軍のやり方で拷問してやる」

やはりイリには独裁者の素養があった。

「榊、加藤。宇宙戦艦に戻ります」

緊張感が走る。

「それでどうするのですか」

「言ったでしょ！ 宇宙戦艦でソシアに乗り込んでプレンコンを問い詰めます。答えによっては容赦しません」

「イリ様。自重を」

長老が風を送る。しかし、イリの熱を冷ますには弱い風だった。